

# 組織目標評価報告書（平成28年度）

部局名： 大学院環境生命科学研究所  
廃棄物マネジメント研究センター      部局長名： 神崎 浩

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>①-1 目標</b>	<b>①-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>①大学院の課程修了時における質の確保等を図るための中間評価や成績評価の基準について検討する。</p> <p>②研究科教員の共通教育(特別コース、英語講義など)への貢献を業績評価等に結び付けて教育インセンティブを高める。</p> <p>③人事に関してテニュア・トラック制度及びウーマン・テニュア・トラック制度を引き続き活用し、また外国人教員の採用に努める。</p> <p>④これまで通り、異分野融合、国際化、ESD、きめ細かい学生指導を柱とした教育を行う。</p> <p>⑤豊かな教養力を身につけさせるために、ESDをベースとした教育科目を提供することを検討する。</p> <p>⑥コースワークの充実化とともに、進路の希望に合った履修方法について検討する。</p> <p>⑦特別コースについて持続可能性の評価と制度の見直しを行う。</p> <p>⑧コースワークの学習成果や卒業後の進路の調査を行い、教育成果を把握する。</p> <p>⑨コンプライアンス教育、キャリアパス教育を行う。</p> <p>⑩博士後期課程学生に対し他分野のRAIに就くことを奨励する。</p> <p>⑪博士前期課程では、フェ大学院特別コースの学生を継続的に受け入れて教育する。</p> <p>⑫博士後期課程では、海外大学とのツィニングプログラム等について可能性を検討する。</p> <p>⑬国費・私費留学生の他に、自国の奨学金制度やJICA等の研修制度を利用する学生を積極的に行う。</p> <p>⑭留学生が英語で受講できる専門科目の数を増やして充実を図る。</p>	<p>①中間評価実施の有無は講座や研究室によって違っており、講座や専攻で基準を統一することについて議論を進めた。</p> <p>②共通教育(特別コース、英語講義など)については業績評価において一般の科目よりも高い評価を与えることの合意を得て、来年度から評価項目を設定することになった。</p> <p>③人事に関してはテニュア・トラック(TT)制度、ウーマン・テニュア・トラック(WTT)制度の採用は無かったが、ポストアップでWTTの女性教員が昇任した。外国人教員は非常勤教員で1人採用した。</p> <p>④異分野融合、国際化、ESD、きめ細かい学生指導を4つの柱として学生教育を行った。</p> <p>⑤ESD実践論の集中講義を開講し、特別開講科目のESD実践演習を開講した。</p> <p>⑥専攻概論の教育内容の充実化及び専攻特論の見直しを行った。進路希望に合った履修方法の設計は来年度に引き継ぎ。</p> <p>⑦先進基礎科学特別コースを発展的に解消し、横断フレックスBMD特別コースの設置準備を行った。</p> <p>⑧コースワークの学習成果についてアンケート調査を行った。</p> <p>⑨コンプライアンス教育、キャリアパス教育を専攻概論や専攻特論の中で実施した。</p> <p>⑩博士後期課程学生に対し他分野のRAIに就くことを奨励した。</p> <p>⑪博士前期課程では、ベトナム・フェ大学院特別コースに8名の学生受け入れ教育した。</p> <p>⑫博士後期課程のフェ大学とのツィニングプログラムの可能性について、今後も引き続き進めてゆく。</p> <p>⑬国際社会人特別コース(博士後期過程)でベトナム奨学金制度(名称911)やJICA研修制度の留学生を受け入れる準備を進めている。</p> <p>⑭留学生が英語で受講できるグローバルスタディコースの講義数を増やした。</p>
<b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>①-2 大学全体への貢献</b>
入学定員の充足率を100%とする。	検討したフレックスBMDコースは環境生命・自然科学の両研究科以外にも適用可能な教育コンセプトを含んでいる。
<b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>①-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
入学定員の充足率を100%とする。	平成28年度の入学定員充足率は博士前期課程が87.4%、博士後期課程が92.9%となった。博士前期課程の充足率が上がるように大学院の魅力や学生にアピールしてゆく必要があると考えられたため、全ての講座で基礎学部所属学生に対して大学院進学を促進する行事(卒業生等による講演会)を研究科長裁量経費で実施した。
<b>②研究領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>②-1 目標</b>	<b>②-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組</b>
<p>①研究大学「岡山大学」の一翼を担う部局として、研究成果の積極的な情報発信(e-Bulletinによる情報発信、URAを含む研究推進本部との連携強化、国際交流の推進等)と研究体制の強化(科研費応募数と採択率の向上、若手研究者の科研費申請支援、概要要求などの大型競争的外部資金への積極的な応募等)を行う。</p> <p>②国際共同研究を推進する。研究者の個人的つながりによる共同研究から、研究科レベルでの組織的な共同体制作りを発展するよう、状況把握と研究科としての支援に努める。</p> <p>③ウーマン・テニュア・トラック教員として受け入れた女性教員がテニュア教員になるために必要な実績を着実に積み上げるための支援を継続する。また、女性教員を含む若手研究者が海外の研究機関への滞在経験を通して岡山大学のグローバル化を推進することができるよう、経費申請への支援、派遣中の業務補充についての方策などについて検討を進める。</p>	<p>① 研究成果の積極的な情報発信のため、研究科の英文ホームページの改訂作業を進めた。URAと協力して海外の大学の学生をインターンシップの形で受け入れることで、国際交流の推進と国際的な研究を強化した。科研費申請については前年度の採択数(前年度申請分に対する採択。継続を含む)69件から、131件に90%増加し、受入金額については、前年度の1億3800万円から1億7600万円へと約28%増加した。これは、科研費の添削や様々な対策が功を奏したものと考えている。一方、科研費、受託研究費、共同研究費、寄付金を合計した競争的資金の総額では、27年度の4億9500万円から28年12月末時点では4億7050万円へとわずかに減少している。しかし、年度末にかけて共同研究や寄付金の増加が見込めることから、年度全体では昨年と同じかわずかに増加するものと予想している。今後は、科研費で達成した大幅増加を受託研究や共同研究の増加にもつなげられるような取り組みを検討していく必要があるものと考えている。</p> <p>② 国際共同研究に繋がる各種の募集などに対して積極的に応募するよう、構成員に働きかけを行った。結果として、URAによるSAKUプログラムでの派遣2名(環境系・珠玖准教授・フィンランドとオランダ、農学系・宗正助教・エストニア)、科研費の国際共同研究加速基金枠で1名(農学系・前田助教・ベルギー)、研究科長裁量経費による国際共同研究補助1名(環境系・中嶋助教・タイ)、農学部での教育改善経費による派遣3名(農学系・中村助教・アメリカ、田中助教・韓国、大仲准教授・ベトナム)など、多数の派遣が実現した。これらは、教育の項で述べる国際社会人特別コースの学生確保とも関連しており、国際的な研究と教育を同時に推進する先進的な取り組みとなっている。</p> <p>③ 環境生命科学研究所は、ウーマンテニュアトラック(WTT)制度を積極的に活用し、多数のWTT教員を採用してその支援を行っている。その結果、本年度は1名のWTT教員がテニュアを取得し、既にテニュアを取得している元WTT教員がポストアップ制度を活用して准教授に昇任した。さらに今年度ポストアップ申請をして次点で選考されなかった教員について来年度昇任への申請を行った。また、海外の研究機関等に滞在して研究を実施するWTT教員を支援するため、岡山大学の研究支援員事業を活用して、2名のWTT教員に対して研究支援員を配置し、元WTT教員の海外渡航中の業務を支援するため、科研費を活用して1名の補助員を配置した。これらにより、女性教員を含む若手研究者の研究推進と海外の研究機関への滞在経験を積ませることの支援策が整ってきたと言えるが、これらの成果に基づき、さらに支援策の高度化・効率化を進める必要があると考えている。</p>
<b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>②-2 大学全体への貢献</b>
競争的外部資金受け入れの5%増。	岡山大学が推進する女性教員の増加方針に対して、環境生命科学研究所は多数のWTT教員を採用し、さらにその後のテニュア取得や研究支援、海外派遣などで強力に支援することで、全学としての目標の達成に大きく貢献している。
<b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	<b>②-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況</b>
競争的外部資金受け入れの5%増。	競争的外部資金(科研費、受託研究費、共同研究費)の受け入れ合計件数は、27年度の180件から28年度の181件へとわずかに増加するにとどまった。これには年度間の自然な変動を含む様々な要因が考えられるが、当研究科では環境理工学部、農学部と協力して科研費の採択率向上のための取り組みを工夫しながら続けており、この効果が現れることを期待すると共に、有効な方策を常に検討していかなければならないと考えている。

③社会貢献(診療を含む)領域	自己評価
③-1 目標	③-1 目標の達成状況及び新たに生じた課題への取組
<p>①環境生命科学の教育研究拠点として、環境問題と食料問題に対する研究成果を地域、国、および海外に対して発信することによって、持続発展教育(ESD)の普及発展、持続的な食料生産、および環境保全に向けた社会貢献を促進する。</p> <p>②国際交流協定の締結を積極的に進め、国際社会人特別コースをはじめ国際的に連携した教育研究プログラムを維持及び発展させることによって、国際的に活躍できる人材を育成し輩出する。</p> <p>③廃棄物マネジメント研究センターを中心として、廃棄物に係る研究プロジェクトの企画と支援を行うとともに、「学官パートナーシップによるアジア・太平洋諸国を対象とした廃棄物マネジメントの実践的教育研究」による事業等の成果をもとに、廃棄物分野における社会貢献及び開発途上国での人材教育を強化する。</p>	<p>①記者発表、研究科HP、セミナー、シンポジウム、公開講座などを通じて、環境問題と食糧問題に対する研究成果を情報発信した。特に、研究科国際シンポジウムInternational Symposium on Environmental and Life ScienceとコロキウムDebrief Session of the Project Researches on "Environmental Rehabilitation in Asia"では、海外の研究者を招聘することによって、海外に向け国際的な研究と教育について情報発信した。</p> <p>②国際交流協定の締結を積極的に進めたと同時に、岡山大学-フエ大学院特別コース(修士号取得)の発展形として博士後期課程に国際社会人特別コース(修士号取得)を設け、ASEANを中心として学位未取得研究者の受け入れを開始した。このプログラムの修了者によって今後国際的に活躍し、日本との連携を深めることができる人材を輩出できることが期待される。また、岡山大学-フエ大学院特別コースについては第1ステージ10年の後、第2ステージ5年を継続する事を岡山大学全体として決定し、里親についても現状と同数確保した。さらに、ベトナム教育訓練省が、岡山大学-フエ大学院を高く評価し、フエ大学の若手教員が岡山大学で博士号取得するためにベトナム政府の博士後期課程奨学金(911)を特別枠(10名)としてフエ大学に準備する事が確約された。さらにこれらのプロジェクトを全学に発展させるため、概算要求(機能強化経費 戦略①)として「国際異分野共同による教育研究を核とする国際社会人共同博士号取得拠点の形成 -日本版大学院高等教育システムの海外展開-」を申請し、採択された。</p> <p>③公開講座、ESD環境イベント「集まれ！未来のエコ博士」、廃棄物マネジメントスクール(さくらサイエンスプラン)を、市民や途上国学生に対して開催し、アジア諸国都市の廃棄物マネジメントに関する問題に対し現地での調査研究を推進した。</p> <p><b>③-2 大学全体への貢献</b></p> <p>全学の目標「社会が抱える課題を解決するため、総合大学の利点を活かし、大学の知や技術の成果を社会に還元すると同時に、積極的に社会との双方向的な連携を目指す。」に対して、地球レベルと地域レベルで解決しなければならない重要な課題である環境問題と食料問題の解決のため、個々の研究成果だけでなく、異分野融合による共同研究を進め、その成果をもとに地域社会との連携を深めた。留学生の受け入れに関しては、全学プログラムとしての岡山大学-フエ大学院特別コースをさらに継続発展する事を決定した事、博士後期課程に全研究科に発展可能な国際社会人特別コースを設置し、ベトナム政府の奨学金特別枠による留学生もそのコースで受け入れる事を決定した事等、全学のロールモデルとなる制度を確立できた。</p>
③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	③-3 目標とする(重要視する)客観的指標を達成するための取組・達成状況
2校以上の新たな国際交流協定の締結。	<p>大学間協定  浙江工業大学(中国)、5月、部局間協定から大学間協定へ格上げ  モンゴル国立大学(モンゴル)、7月、更新  ノラム大学(ベトナム)、8月、部局間協定から大学間協定へ格上げ  ケベック先端科学技術大学院大学(カナダ)、9月、学生交流附属文書のみ締結。※協定はH28.2.2に締結  ストラスブール大学(フランス)、10月、教職員交流の附属文書のみ締結。※協定、学生交流附属文書はH23.1.21に締結  鄭州大学(中国)、10月、更新  マケレレ大学(ウガンダ)、11月、新規  部局間協定  バツアカリ科学技術大学畜産獣医学部(バングラディシュ)、5月、新規  テラモ大学獣医学部(イタリア)、9月、新規  ホーチミン市経済大学経済学部(ベトナム)、11月、新規</p>
<b>【総括記述欄】</b>	
<p>本研究科では研究科長室のガバナンスにより、この先10年程度の各講座の人事計画を立案させ、その計画に基づいた人事については、迅速に対応し、教授昇任についても優秀な人材については、内部昇任も可能としてきた。その結果今年度は、内部昇任5件を含む13件の人事を実施し、定年退職や他大学等への転出に対して途切れる事の無い人事補充が達成できた。また、女性教員の登用も積極的に行なっており、今年度WTT教員を新たに1名採用するとともに、ポストアップ制度によりWTTからテニユア助教になった女性教員を准教授昇任させた。今後教育・研究面はもちろん管理運営についても積極的関与してくれる事を期待している。</p> <p>岡山大学-フエ大学院プロジェクトについて10年の第1ステージから5年の第2ステージへの延長を岡山大学として決定し、その成果を元に、国際社会人特別コースの実施、ベトナム教育訓練省からの岡山大学博士後期課程入学者のための特別枠奨学金の獲得、概算要求の獲得等へつながった事は、これまでの成果を多いに活かせたと考えている。</p> <p>今後も国際異分野共同研究に根ざした、大学院教育を積極的に進めることにより、留学生の確保、教員の英語力強化等を推進していく予定である。まず、概算要求で認められた、「国際異分野共同による教育研究を核とする国際社会人共同博士号取得拠点の形成 -日本版大学院高等教育システムの海外展開-」を着実に実行していく事が重要と考えている。なお、このプログラムについては、新たな教員を採用するが、それにはクロスアポイントメント制度を利用した、本学で博士学位を取得し母国で教員となった卒業生の登用も含め新たな取組を考えている。このシステムを岡山大学全体に波及できるような形で進めていく事が課題である。</p>	